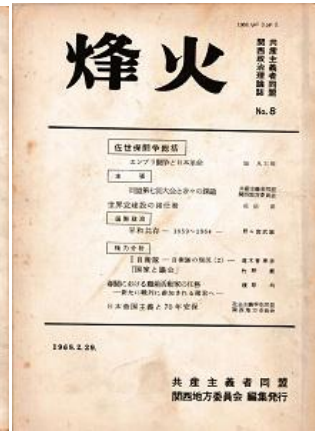
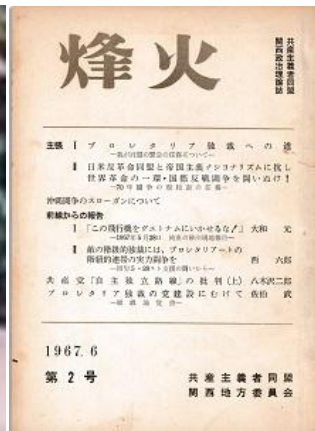


★野茂樹さんを偲ぶ会(東京)

2020年10月10日



偲ぶ会の主旨

佐野茂樹(佐伯武)さんが、2020年1月21日に亡くなりました。

1938年生まれ、享年81歳でした

下記の要領で東京の「偲ぶ会」を企画します(京都の「会」は3・22)。ご参加下さい。

佐野さんは、第一次ブンドの時期には全学連副委員長でした。第二次ブンド(1966年第6回大会で再建)の時期には、68年の第7回大会で議長に、第8回大会で副議長に就任し、69年4・28「中央権力闘争」を軍事委員会委員長として指導しました。ブンド崩壊後は、「緑の地球ネットワーク」(GEN)代表として環境運動に取り組んできました。

第二次ブンドとその闘争、ベトナム反戦・安保・沖縄闘争については、多くの人びとに大きな「想い」があると思います。当時は、情熱と確信をもって参加した。そして、大きな歴史的意味があった。しかし、その後の経緯と経験から考えると、大きな反省もあるのではないかと思います。このような「想い」を持ちながら、今日までの半世紀、組織を維持し、運動を続け、それができなくても志だけは持ち続けてきたのではないかと思います。

縁のある者が集まり、佐野さんを偲びながら、「想い」を語ろうではありませんか。

会次第

開会の辞

献杯

発言……………自己紹介と佐野さんとの縁を中心に(参加者全員)

食事・懇談

閉会の辞

佐野茂樹(佐伯武)

1938 年生まれ 2020 年 1 月 21 日死去(享年 81 歳)

56 年 京都大学入学

57 年 京都府学連委員長

58 年 全学連第 11 回大会副委員長

59 年 共産同京都大学細胞結成

65 年 共産同統一委員会結成大会中央委員(佐伯武・在関西)

65 年 「日本階級闘争の前衛部隊＝共産主義者同盟を先頭に前進を開始せよ！」
(『先駆』31号)

66 年 共産同再建第 6 回大会中央委員

「政治情勢の特質と我々の運動目標」(『烽火』No.1)

67 年 「プロレタリア独裁の党建設にむけて」(『烽火』No.2)

「70 年安保と沖縄問題」(『烽火』No.5)

68 年 共産同第 7 回大会議長

共産同第 8 回大会副議長(軍事委員長)

「革命党建設の諸任務」(『烽火』No.5)

「世界党建設の諸任務」(『烽火』No.8)

70 年 「蜂起に関する覚書」(『序章』2号)

71 年 「佐藤政府を倒せ！武装闘争と大衆路線を結合・発展させよ！」

「帝国主義を包囲せよ！獄中論文選」

72 年 「日本共産主義運動前史から本史へ」(『序章』8号)

「団結－批判－団結」(『査証』No.3)

76 年 「朝鮮民族自決－統一と日本共産主義運動の原則的任務(上)」

92 年 「緑の地球ネットワーク」(GEN)代表(会報『緑の地球』)

93 年 「国境を超える緑の風」シンポジウム

★佐野茂樹さんを偲ぶ

重信房子(2020.03.05)

私にとっては佐野さんは先輩であり、私を革命の道に誘った人として、哀悼と惜別の想いで御冥福を祈っています。佐野さんは、明大二部社学同・現代思想研究会(現思研)にとっては、誰よりもブントを体現されている方でした。温和で礼儀をわきまえた気さくな先輩と、私たちは尊敬していました。

67年の10・8羽田闘争の日、学館に戻って、「すごい時代に入った」などと皆で話し合った日のことを思い出します。佐野さんが「でも牛乳瓶があんなに美しいとは思わなかったなあ」と言ったので、そのあまりに詩的なイメージにびっくりしました。確かに、衝突の攻防で石や牛乳瓶が飛び交い、放水と太陽の虹の中に牛乳瓶はきらきら輝いていたのです。以来、私たちは、真面目な先輩のその言葉尻を冷やかしたりしたものです。

佐野さんは、67年から68年、あの国際反戦集会を含めて、ブントを代表し基調報告を行っていました。その一方で、現思研に訪ねてきて『少年サンデー』『少年マガジン』『ガロ』を借りてい

く、気さくで身近な先輩でした。

その佐野さんから、私は、69年の4・28 沖縄闘争のための軍事委員会書記局を手伝ってほしいと頼まれたことがあります。軍事委員会の非公然準備は、大学を離れて市民社会内部に準備するとのことでした。これが、初めて私が大学を離れた党活動に関わったきっかけとなりました。新橋の小さなビルに「劇団青天井」の名で借りた事務所で、4・28 闘争準備が始まりました。当時、私は、銀座のバーでアルバイトをしていたので、昼は「劇団青天井」の仕事、夜はバーへ出て遅く学館に戻るという活動を続けました。

4・28 闘争はこれまでの闘いを超える戦術をとるとのことで、関西から「試作品」をもって話し合いに来る人も居ました。又、ある時には、「試作品」を前に、元ブント議長の松本礼二さん、現議長の仏徳二さんと前議長の佐野さんの3人で、激しく論争し合っていました。

闘いの質を武装へと転換すべきだと主張する佐野さんに対し、松本礼二さんが時期早尚を主張して断固として反対し、一步も引かず、仏さんも同調して、結局、これまでの戦術をとることになりました。それが、霞が関占拠を訴えつつ、裏をかいて銀座・新橋へとカルチャータン方式を基本とする戦術でした。この4・28 闘争は、前日から官憲の搜索や破防法適用など、激しい弾圧の中で闘われ、各党派のリーダーたちへの逮捕攻撃が続きました。

この4・28 闘争の総括を巡って、「敗北」と総括した関西ブント中心に、後に赤軍派フラクが形成されていきます。私自身は、高原さんに誘われてフラクに協力するようになりましたが、このフラクのリーダーは佐野さんだろうと当初は思っていました。

「7・6事件」が起き、私も一步踏み出して活動するようになったころ、佐野さんが逮捕されました。10月位でしょうか、佐野さんからの電報で、「至急面会乞う」というので、小菅の拘置所に面会に行きました。佐野さんは、「4・28 闘争の件で君にも迷惑がかかる。申し訳ない。自分の責任で、君は何の罪もない。もし逮捕されたら、私の指示で自分は知らないと答えてほしい。」と謝罪され、その律義さに驚きました。「心配はいりません」と答えました。

11月になって、私も「4・28 闘争」の「凶器準備幫助罪」で逮捕されました。以降、会う機会もなのまま69年から今年になって、佐野さんの逝去を知りました。

ふりかえてみると、私を革命の道へと導いたのは、佐野さんのあの4・28 闘争の軍事委員会への参加の誘いだったと思います。ロマンと情熱にあふれた人柄は、きっと一世代下の赤軍派とはなじまなかったのでしょうか。でも、ブントが一番輝いていた時代を、60年安保を継承して築いたリーダーとして、佐野さんはブントの歴史に深く刻まれています。もう一度会って、私の経験を語りたい先輩を失いました。この彼岸、哀悼を捧げるつもりです。

★佐野さんへの追悼文

田中正治(2020.03.02)

「60年代中期に関西ブンド関西地方委員会のリーダー佐野茂樹は、70年に武装蜂起とソヴィエト運動を構想し、関西地方委員会に提案している」と榎原均氏は「追想にあらず一建軍の時代ー」の中であなたのことを回想しています。

佐野さん、あなたは僕の記憶の中では、信念と原理に生きた革命家でした。佐野さんの死を聞いたとき、それは革命家の死の姿なのだと感じました。

死を前にして、富や名誉は何の意味もありません。この世での他者への愛と信頼と連帯こそが、唯一あの世への旅立ちに勇気を与えてくれたものだと信じます。

私たちの世代に残された時間はもはや多くはありませんが、信念と原理に生きたあなたを思い活動を続けます。

★佐野さんを偲ぶ そして考えたこと

高原浩之(2020.03.09)

思い出

佐野さんは、1968年2月の第7回大会が選任したブンドの議長=最高指導者でした。

私も一緒に上京し、少し後に学対部長になりました。しかし、ブンドの指導部を担うことができず、12月の第8回大会で、佐野さんも私も辞任しました。それでも、佐野さんは軍事委員長、私は共闘関係担当として、一緒に69年4・28「中央権力闘争」を準備しました。一緒に活動したのはここまででした。この後、私は赤軍派に走った。

佐野さんを思い出していると、考えはやはりブンド第7回大会に行き着きます。

ブンド第7回大会

「過渡期世界論」を打ち出し、70年闘争の指導で大きな役割を果たしました。

しかし、マル戦派に対する「内ゲバ」「リンチ」は大きな誤りでした。その後の大衆闘争の高揚の中で、逆にこの大きな誤りを肯定してしまっただけです。関西ブンド、とりわけ上京グループは自己批判し謝罪しなくてはならない。その一人として私は謝罪したい。

他人の「痛み」は分からない。「痛み」は自分が受けて初めて分かる。後悔しても遅いが、連合赤軍事件の要因は、7・6事件に、そのまた要因はこの第7回大会にあった。

連合赤軍事件や「対革マル戦争」は、日本の人民闘争と革命運動に壊滅的な損害となった。国際共産主義運動には、スターリン以来、「粛清」が常に存在した。この悪い体質は必ず清算されなくてはならない。「内ゲバ」「リンチ」には生身の人間関係がある。清算のためには、被害者に対する加害者の具体的な謝罪が絶対に必要であると思う。

「過渡期世界論」

「帝国主義から社会主義への過渡期」と「三ブロック階級闘争の結合」という規定、そして、ベトナム民族解放闘争および中国社会主義革命(文化大革命)と結合する国際主義、この理論は当時のベトナム反戦闘争において、強力な指導となった。半世紀後の今日でもブンド系に大きな評価もあります。

しかし、観念論が濃厚にあった。赤軍派の主観主義、それは、小ブルジョア急進主義の特徴であるが、「過渡期世界論」に大きな要因があったと総括せざるをえません。

革命の根拠を、ほぼ全て、歴史認識=「帝国主義から社会主義への過渡期」に求めた。政治的上部構造を経済的土台から切り離し、資本主義の帝国主義段階の継続を見なかった。日本の社会主義革命を、日本資本主義の矛盾からではなく、ほぼ全て、国際主義=「三ブロック階級闘争の結合」から展望した。それを赤軍派は極限化し、武装蜂起・革命戦争の根拠を「世界武装プロレタリアート」に求め、「国際根拠地建設」に走った。

20世紀は資本主義の世界化に終わった。資本主義の帝国主義段階が継続し、グローバリズムの現実がある。ソ連だけでなく、中国やベトナムで社会主義革命と民族解放闘争が挫折し変質し、官僚制国家資本主義化した現実がある。この現実に合わせて、「帝国主義から社会主義への過渡期」と「三ブロック階級闘争の結合」という規定を見直さなくてはならない。

日本の社会主義革命は、日本資本主義の矛盾を基に内在的に展望しなくてはならない。20

～21世紀という長いスパンで現状分析する現代帝国主義論が必要だと思う。こういう経験の総括を遺すことは、闘争と運動のために何か役立つと思う。(おわり)

★佐野茂樹さんを偲ぶ

2020年4月11日 渡邊義明

①佐野茂樹さんは再建された共産主義者同盟の1968年3月の第7回大会で全国委員会議長になりました、小生はその時共産主義者同盟京大細胞のCapでした。

その後、小生は1968年7月関西学生対策部長、1968年9月大阪南地区委員会Cap・関西地方委員会反戦フラクションCap、1969年3月共産主義同盟関西地方委員会青年対策部長・関西地方委員会副議長となりました。

佐野茂樹さんが共産主義者同盟全国委員会副議長・軍事委員長として指導した1969年4.28沖縄闘争には関西の青年労働者100人を引率し、棒と石で武装させました(労働者の初の街頭実力闘争)。

共産青年同盟関西地方委員会の1969.4.28闘争の総括・方針が書けないでいたところ、1969年赤軍派フラクションから「1969年秋前段階蜂起＝首相官邸占拠・臨時革命政府樹立」が提案されました。

銃で武装しての首相官邸占拠には賛成でしたが、臨時革命政府樹立＝日本革命になるとは思いませんでした(学生は成熟しているが、労働者はごく一部しか同盟・革命的左翼に組織されていない・労働者はマッセンスライキができない←1969.04.28逮捕の青年労働者の多くが自供した)。

小生は、赤軍派提案への対案を書けませんでした。行き詰まって、1969年6月1日脱盟届を関西地方委員会に出し京大熊野寮に戻ります(脱盟届「首都圏に行き労働者になって再出発する」)。

1969年7.6に、赤軍派による仏徳二議長リンチが起きます。

1969年12月小生は文学部共闘会議から相談を受け、文学部・京大全共闘解散大会を主催し封鎖解除後の授業粉碎闘争を終了させます。

1970年1月に活動を再開し、6月京大全学ストライキを組織しながら、首都圏の労働運動に入る上京団候補を募ります(京大労研―後の労働運動研究会・三里塚闘争を支援する労働者の会―結成)。

佐野さんと小生(故藤本敏夫さんも)は、共産主義者同盟の分派闘争・赤軍派への対応が似ていると思います、分派に加わらず個人になりました。

1970年か1971年か分かりませんが、佐野さんは京大労研から除名・独立した京大レーニン研・京大C戦線の顧問となります。

②小生は、1972年3月上京して労働運動に入り、また全国の反差別・反公害住民運動を担って今に至ります。

③1968年3月の第7回大会で水沢史郎書記長の発言を遮り、引き摺り下ろす役を演じた(旧主流派・マルクス主義戦線派を同盟から排除する目的で)ことを自己批判します。

日本共産党・革マルと異なり内ゲバをしないとの評判だった関西ブントの内ゲバの発端を担ったのです。旧マルクス主義戦線派の方に詫びねばなりません。

★佐野茂樹さんに会いたくて

江刺昭子

元ブントの活動家が、60年安保闘争で命を落した樺美智子の思い出に触れるとき、話題になるのは、彼女が好きだったのは誰だろうということだ。あの人、この人と噂があるなかで、決定的ともいえる答えを提供したのは島成郎『ブント私史』。出発したばかりのブントの書記局に常駐して雑務を担当していた樺さんがある日、「島さんは大人だから相談したいのですが、私、想いを寄せる人がいるのです」と話しかけ、「それはSさんです」と打ち明けたという。島博子さんは、それは佐野茂樹さんだと証言する。

佐野さんと樺さんは神戸高校の同級生で(1953年入学)、ともに自治会役員を務めてリーダーシップを発揮し、思想信条を同じくする同志だった。

56年、佐野さんは現役で京大に入学し、まもなく共産党に入党。樺さんは東京に引っ越し、1年浪人して東大に入り、57年末に入党する。翌年、佐野さんは全学連副委員長に就任し東京に常駐。58年末には2人とも共産党を離党してブントに加盟している。

樺光子編『人知れず微笑まん 樺美智子遺稿集』と『友へ 樺美智子の手紙』には、樺さんが神戸高校時代の女友だちに「階級闘争に没頭している人にはめったに会えない」とこぼす手紙などがあり、この間の2人の消息がわかる。新開純也さんも2人がつきあっていたと、佐野さんから聞いている。

樺さんの評伝を書くために関係者の取材を始めた2005年、わたしは佐野さんに取材依頼の手紙を出した。樺さんの手紙も所蔵しているというので見せてほしいとお願いした。

会う約束をしたが、直前に断りの手紙がきた。評伝をほぼ書き上げた09年、翌10年と三度取材を申し込んだが、やはり約束の前日に速達が来てキャンセルされた。心残りだったが、2人の交流に触れぬまま、10年に『樺美智子 聖少女伝説』(文藝春秋)を出版した。

わたしはまた、数年前から、連合赤軍事件で亡くなった遠山美枝子さんについて書くつもりで、高原浩之さんや関係者に話を聞かせてもらっている。そのなかで第二次ブント議長の佐野さんが明治大学にオルグに入り、遠山さんや重信房子さんに会っていることを知った。

女性の活動家として、そのひたむきさ、誠実さが共通する2人が佐野さんを通じてつながった。なんという偶然だろう。佐野さんに会いたい思いが募り、京都の片岡卓三さんをお願いし、昨年12月、寝屋川市のお宅を訪問した。片岡さんと山崎一郎さんが同席して2時間余、話題はあちこちに飛んだ。佐野さんはベッドに腰かけての対応だったが、精悍なおもざしは残っており、まもなく亡くなれるとはとても思えなかった。今は、わたしの願いをかなえてくださったことに感謝あるのみ。

60年安保から60年が経ち、樺美智子の名も知らない人がほとんどになったが、彼女がどんな社会を望み、どんな闘いをして死んだのか、その実像を伝えたいと思い、今年2月25日から3月1日までネットニュースに連載した(「47ニュース・江刺昭子」で検索すると読めます)。旧著『樺美智子 聖少女伝説』は、『樺美智子、安保闘争に斃れた東大生』とタイトルを変更し、6月に河出文庫として出版予定。遠山さんについても、昨年出版した『時代を拓いた女たち かながわの112人』(神奈川新聞社)にわずか2ページだが紹介した。いずれ、まとまった形にしたいと思っている(2020. 3. 30記)。